

《第 499 回(2023 年 2 月 9 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:6 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『目で見ることばで話をさせて』 アン・クリア・レゾット/作, 横山 和江/訳 岩波書店

2 月の課題図書は、アメリカのマーサズ・ヴィンヤード島を舞台とした歴史フィクション。実在するこの島はかつて、遺伝性難聴によるろう者の割合が 25 人に 1 人だったそうです。主人公の少女メアリーが生きた 19 世紀のこの島では、島民の誰もが手話を使い、ろう者と聴者が分け隔てなく暮らしていました。耳が聞こえないメアリーも、手話を使って家族や友達と会話し、日常生活で困ることはありませんでした。しかしある日、アンドリューと名乗る科学者が島の外からやってきたことで、メアリーの日常は変わっていき……。作者であるアン・クリア・レゾット自身もろう者で、耳が聞こえない主人公から見た世界が生き生きと描かれています。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●ろうであることがハンディキャップになっていない世界に驚いた。とても理想的な社会だと思う。メアリーが誘拐されたところはハラハラドキドキした。アンドリューは、最初良い人かと思ったけど、とんでもない人だった。19 世紀という時代背景を考えても、彼がやったことはひどいと思う。島とボストンを行き来するのに、当時の船では数日かかっていたということに驚いた。この本を執筆するにあたって作者が参考にしたという、『みんなが手話で話した島』(早川書房)も面白かった。

●最初はメアリーの成長物語かと思ったけど、ろうのことだけでなく、家族問題や人種差別など、様々な要素が入っていて考えさせられた。舞台は 200 年前だが、今の状況もあまり変わっていないと思う。話し言葉と手話で、鍵括弧の種類が分けられていたので、読みやすかった。メアリーが島で読み書きの教育を受けていたことが、事件解決のカギとなった。教育の大切さを改めて感じた。出会えてよかったと思えた作品。続編も気になるので、早く日本語版が出版されてほしい。

●手話は言語だと思う。島と島外はそもそも土俵が違うのに、アンドリューは無理矢理違いをなくそうとしている。ろうの人が書いた本というだけあって、描写が丁寧。言葉が発せられない分、目に見えるものを表現する力に長けているのかな。島の中では

メアリーは支配者側だけど、島を出たら、ろう者であることで差別される。また、島の中でも人種差別や性差別が存在する。色々な差別が物語に組み込まれていて、考えさせられた。

●とても読みやすく、物語の中に入りこめた。メアリー目線で書かれているが、彼女がろう者であることを意識せずに読むことができた。誘拐されたシーンはハラハラしたが、最後は希望が見える終わり方でよかった。島の生活が生き生きと描かれているのも良い。アンドリューはスペックは高いが、協調性はない。ろう者も聴者も、教育や人の関わりが大切なんだなと思った。手話にも上手・下手があることは初めて知った。話し方の上手・下手のようで、面白いなと思った。

●読む前は、ろう者と聴者が分け隔てなく暮らしている島が舞台ということで、理想的で平和な環境なんだろうと思っていた。しかし、実際は他の差別が存在しており、ろう者差別がないこと以外は島外とあまり変わらないんだなと思った。作者自身がろう者ということで、音が聞こえない世界がリアルに感じられた。ネットや旅行雑誌でマーサズ・ヴィンヤード島を調べると、とても美しい景色の写真が載っていて、興味が湧いた。表紙の絵で描かれている船の意味に、読後に気づき、納得した。

●手話が特別なことではない島があったことに驚いた。聴覚障害の人も聞こえる人も、区別なく暮らしている世界は理想的だと感じた。あとがきを読んで、日本にも同じような地域があったと知り、遠いところであったお話ではなく現実にあるんだ、人はこんな世界を作り出すことができるんだと思った。紹介されていた地域が自分の故郷の近くだったので、一層身近に感じられた。誰かに読んでもらいたいと思っていた本だったので、課題本になって嬉しかった。

次回 3 月 9 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『何のために生まれてきたの? 希望のありか』やなせ たかし/著 PHP 研究所

※申込み・参加費は不要です。